

第 10 章 ウィリアムとメアリー時代のガーデニング

[下線部は『都市緑化技術』No.117 掲載箇所]

(仮訳)

“When lavish art her costly work had done, 彼女の犠牲的な仕事により輝かしい芸術が完成した時
The honour and the prize of bravery その勇気に対する荣誉と褒美は
Was by the garden from the Palace won.” 宮殿の庭園によって得られた

Cowley

カウリー

ウィリアム [3 世] とメアリー [2 世] の共同統治の時代 [在位 1689~1702 年] のイン
グランドに、どのくらいの数の庭園が存在していたかを知るのには、国中を馬で旅行した
シーリア・ファインズ Celia Fiennes [1662~1741 年] の日記を見るとよいであろう*。

*『女が馬上から見たウィリアムとメアリーの時代のイングランド』*Through England on a side-saddle in
the time of William and Mary*, 1888 年)

各地で、旅行中のほぼあらゆる場面で、多少は注目すべきと思われる庭園について彼女は
書き留めたり描いたりしている。噴水、あるいは「水を使った仕掛け」は、大庭園の最も
特徴的な外見であったであろうし、それらについて事細かに多数書き残している。チャッ
ツワース Chatsworth には数限りない噴水があり、その一つはヤナギの木で「それぞれの葉
から水が滴り」、「ある庭園」の真ん中には水盤があったが、それは「とても大きなもので、
彫像の脇の水路の近くでは何本ものパイプが水を演じて見せている：大小あわせて 30 本の
パイプの何本かが水を噴き上げ、雪のように泡立てている」。ウィルトンでは洞穴の形をし
た避暑用の建物 grotto があったが、その周り全体と屋根の上にパイプが隠されているよう
であり、そこからお風呂のシャワーのように水が噴き出て「お客さんたちを洗う」仕掛け
となっていた。またブラッドビー Bradby のチェスターフィールド卿 Lord Chesterfield
[1694~1773 年] の邸宅では、「ある庭園には大きな彫像が中に立っている噴水が 3 つある。
その台座のそれぞれの横には時計があり、一つは日時計、もう一つは水の方で動く時計で
毎時、時を知らせ、15 分ごとにチャイムが鳴り、時にはチャイムにあわせてリリバレロ
Lilibolaro [古い歌の名称 Lilliburlero] を演奏する。これが私がそこに滞在した時に聞いたす
べてである」。

これらの水の仕掛けは、チューダー朝時代に導入されたことは既に見てきたとおりであ
るが、今や大いなる流行となっていた。このアイデアは海外、フランスとオランダ双方か
らもたらされた。ヴェルサイユはじめフランス各地の噴水はあまりにも有名なので特筆す
る必要もないが、巧妙な形とビックリさせる水の仕掛けはオランダの庭園に典型的なもの
であり、オレンジ公ウィリアムがほかのオランダの流行と一緒にこの国に人気のある趣向
として持ち込んだものである。1621 年、チャワース卿 Lord Chaworth [~1639 年] はその

日記（*ラウズリ写本）でブリュッセルの王女イサベル **Infanta Isabella** の家を取り囲む「とても素晴らしい庭園」について書いている。「そこには世界で一番素晴らしい水の仕掛けの数々が備えられていた」。ノーサンプトンシャー州ボートン **Boughton** の庭園はこの時代に作られたが、それは初代モンタギュー公爵ラルフ [1638~1709 年] **Ralph, first Duke of Montague** により館が建て直された時であった。その庭園は広大で、100 エーカー以上の広さがあり、「贅沢な水の仕掛け」で目を見張らせるものであった。そこには「彫像のパルテール **parterre** [装飾花壇、道などが装飾的に配置された庭園の構造、幾何学式庭園等に用いられる]、水盤のパルテール、水のパルテールという庭園の構造になっており、その中には円周 216 ヤードの八角形の水盤、その真ん中には高さ 50 フィートの噴水、その周りには小さな噴水が取り囲んでいる・・・それらすべての下にある運河は長さ約 1500 ヤードで 4 本に分かれており、それぞれ直角に流れ込んでいる。その一番下流には非常に気品あふれるカスケード [人工的な滝] が設けられ・・・花瓶と彫像で飾られている。カスケードは 5 段の滝からなっている。垂直面は 7 フィートの高さである。13 番目の噴水の高さのラインあるいは範囲はカスケードの頂点にそろえられている・・・また水盤の下にもいくつかの噴水が作られている。さらに規則正しい姿の小島のような結び目が水生植物によって飾られている」(†ジョン・モートン著『ノーサンプトンシャーの自然史』1712 年)。このようなカスケードは極めて格式高いもので、すべてしっかりした石工細工で作られており、後の時代に見られるようなミニチュアの滝「カスケード」とは似ても似つかぬものであった。ボートンの庭園はフランス流であったが、この時の庭師頭はオランダ人のヴァンデルトメーレン **Vandertmeulen** という人物であった。

シーリア・ファインズによって描かれた庭園にはすべて同じように砂利と草の園路、刈り込まれた木の木陰の小径、「あずまやのような園路もあれば、木陰のもの、広々したもの、砂利の道、草の道」などがあつた。標準的なイトスギないしイチイが「いくつかの形に刈り込まれ点在していた」。セイヨウヒイラギ、月桂樹、ツゲの剪定された生垣により庭園は区切られていた：一たとえば、「最大の噴水がある正面の庭園は」「花木 **flower trees**、あらゆる葉物野菜」から区切られ、あるいは「草原の区画」はボウリング用の緑から区切られていた。「見事なグリーン」や「ドウウォーフ」**dwarfs** (*=小さく剪定された果樹) またはオレンジやレモン；隠れ家や温室についても述べられることもあつた。あるいは、石の階段のある幅広いテラス；松の木が植えられた野趣に富む区画 **wilderness**；通り抜けの小径が作られた茂み；池、運河、美しい門構え、これら様々なものがおそらく彼女の旅の物語を膨らませ、彼女が思い出す情景に真実味を加えているのである。スタッフォード近くの **Thetwin** 氏のところでは狩猟地の「素晴らしい並木」、「スコットランドとノルウェーのモミの木 **ffirs** の仲間と **picanther** [トウヒ類 **Picea** か]」を愛でている。コーンウォールの **Trygothy** では庭園へと開かれている客間について「その庭園は砂利道の園路が庭園の周囲とそれを横切る形に設けられているが、広場はグーズベリーと茂みの木で埋め尽くされ、まるでキッチンガーデンのようにすら見える」と感想を述べている。ワークソップ **Workshop**

近くのブライスについて、「私はそこで美味しいフルーツを食べた」と言い、ウィルトシャーにあるブルック夫人の家で初めてオレンジの木に出会った。「ここには見事な花と緑があり、ドウウォーフ仕立ての木、さらに列植されたオレンジとレモンの木には花と果実が同時に見られ、中には熟しているものもある。これらのオレンジの木は私が今まで見たことがなく初めて見たものであった」。

彼女が一世代前の庭園より、新しいフランス流やオランダ流の庭園の方を称賛しているのは明らかである。ハドン Haddon の通りすがりに、ざっと見ただけだが「それは立派な古い屋敷であり、丘の上に総石造りの館が立っており、その後ろには立派な高木の茂みと庭園あるが、今の流行に比べれば取り立てて興味を惹かれるものではない」と述べている。また、ヘレフォード近くの「Stoake と呼ばれるポール・フォーリー氏の居所」について、「それは立派な木造の古い館であるが時代遅れであり、また庭園も十分な広さがあるが、いずれも昔の形の流行りであり、フォーリー氏は新しい館と庭園を造るつもりである。私が見た庭園はボウリング用グリーンを壁の内側に抱え込み、その中のサマーハウスもみんな新しいものである」と書いている。ヨークシャーのバームストーン Barmstone では、「庭園は大きく、すごく美しくできる可能性があるが、今は昔の流儀のままに放置されている」と記している。ハンティンドン Huntingdon 近くでは、サンドウィッチ卿が新しい庭園を造成させようとしていた。「庭園と手を入れない区画と温室は完成した暁には、ドウウォーフの樹木と砂利の園路とあわせてとても素晴らしいものになるであろう。大きな噴水や水盤はホワイトホールの王室庭園のものに似せて作られ、館の正面に置かれるであろう。高いテラスの園路は道を見下ろすことになる」。

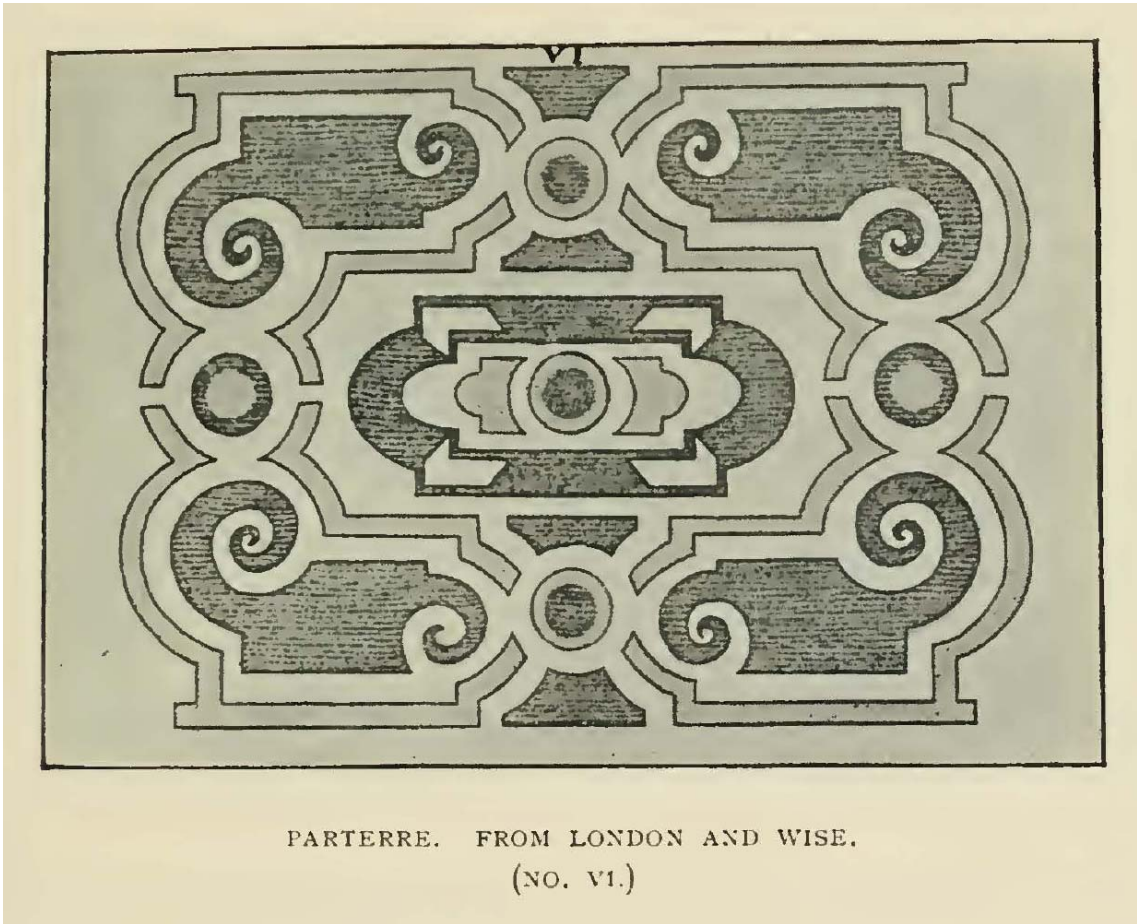
ラムゼー近くにあるサー・ジョン・セントバーブ Sir John St. Barbe [1655頃~1723年]の館では新しい庭園も造られつつあった。「まだ完成はしていないが大変素晴らしいものができるであろう。大きな門が向こうの敷地の方へと開かれており、そこには木が植えられている所もある」。「見通せるように格子が何箇所か」設けられたような壁は、庭園を見渡せることを求める最新の動向に対応したものであり、これは既に見てきたように初期の頃にあった様式である。このような壁の中に門とか鉄格子によって、空間を作る設計は18世紀初めの庭園の眺めとして常に目にするものであった。眺望をさらに広げたいというこの願望は、狩猟地と並木道の計画にあたって、庭園の園路の横あるいは奥のオープンスペースとうまく調和するように計画することにつながった。庭園を周辺と調和させようとする試みは、壁が取り払われてしまう時代に至るまで徐々に広がり、「風景」式“landscape” style が古い形式に取って代わることになった。デザインの変化を研究するにあたって、突然「庭園の壁を跳び越える」ということはなかったように思われる。風景式の始まりは、ゆっくりした変化や古い形式流派の衰退の中に見つけ出されなければならない。ウィリアム 3 世により持ち込まれたオランダ様式は昔からの樹木の刈り込み方法の一つの極端な様式である。イチイ、ツゲ、その他の「樹木」のトピアリー（動物や鳥などの形に刈り込む）剪定はやり過ぎなくらいまで行われ、庭園が刈り込まれた樹木で溢れ返ったので後世の笑

い物になるくらいであり、その結果自滅してしまったのである。

「結び目」という用語がこの当時の本にしょっちゅう出てくるというようなことはなく、代わりに出てくる「パルテール」という用語について少し説明する必要がある。ミーガー Meager [1624 頃～1704 年] は 1688 年『イングランドの庭園師』*English Gardener* の中で、「結び目を作るのに向いている」ハーブのリストを掲げており、そのうち「オランダ、フランスのイチイが育てるのにもっとも見栄えが良く丈夫で安い」としている。加えて同じ章において、読者に対し、本の最後にある図版を参照するよう勧めているが、その図版で彼は「庭園用の種々の形や小画地を視覚的に提示」している。1697 年にミーガーはパルテールを語っており、彼のデザインは極めて同じようなものである。サー・トーマス・ハンマーも、ガーデニングに関して彼が提案した仕事についての覚書で、2 つの言葉を使っている：－「もし敷地が広ければ、隣り合わせの区画、すなわちパルテールとフランス人が呼ぶ区画は、美しい芝生で作られることが多いが、ボウリング用のどのグリーンとも同じくらい低くする；花やアラベスク唐草模様の形、動物や鳥、葉飾りの刺繍となるよう珍しい形に切り込み、小さな小径や隙間を何色かの砂と土で美しく埋め、ただしそのような結び目には花はほんの少しだけ植え、その花も刺繍の美しさを損なわないように成長しても背丈が極めて低いものだけにする」。パルテールは ミラーの辞書 Miller's Dictionary (1724 年) にはこのように説明されている。「敷地の水平分割。その大部分は南向きで館の正面にあるのがベスト、一般的には緑の芝生と花で飾る。パルテールには何種類もあり、ボウリング用グリーン、普通のパルテール、そして刺繍のパルテール・・・普通のパルテールは芝生のおかげでイングランドでは一番美しく、控え目な上品さと変わることのない素朴さが目を楽しませる；そのほかのものは巻貝や渦巻き模様に切り取られ、その間は砂の小径となり、イングランドで一番美しいパルテールづくりと評価されている。

ルイ・リージェ Louis Liger [1658～1717 年] のフランス語をロンドンとワイズが翻訳した『引退した庭師』Retired Gardner の中では、11 種類以上のパルテールが描かれているが、これらはすべて芝生、花壇や切込み cut-work、渦巻き模様や葉飾りのパターン、あるいは「布の上に施された刺繍」のデザインを変えたものに過ぎなかった。以下の 2 つは、彼が描いたものの事例である：

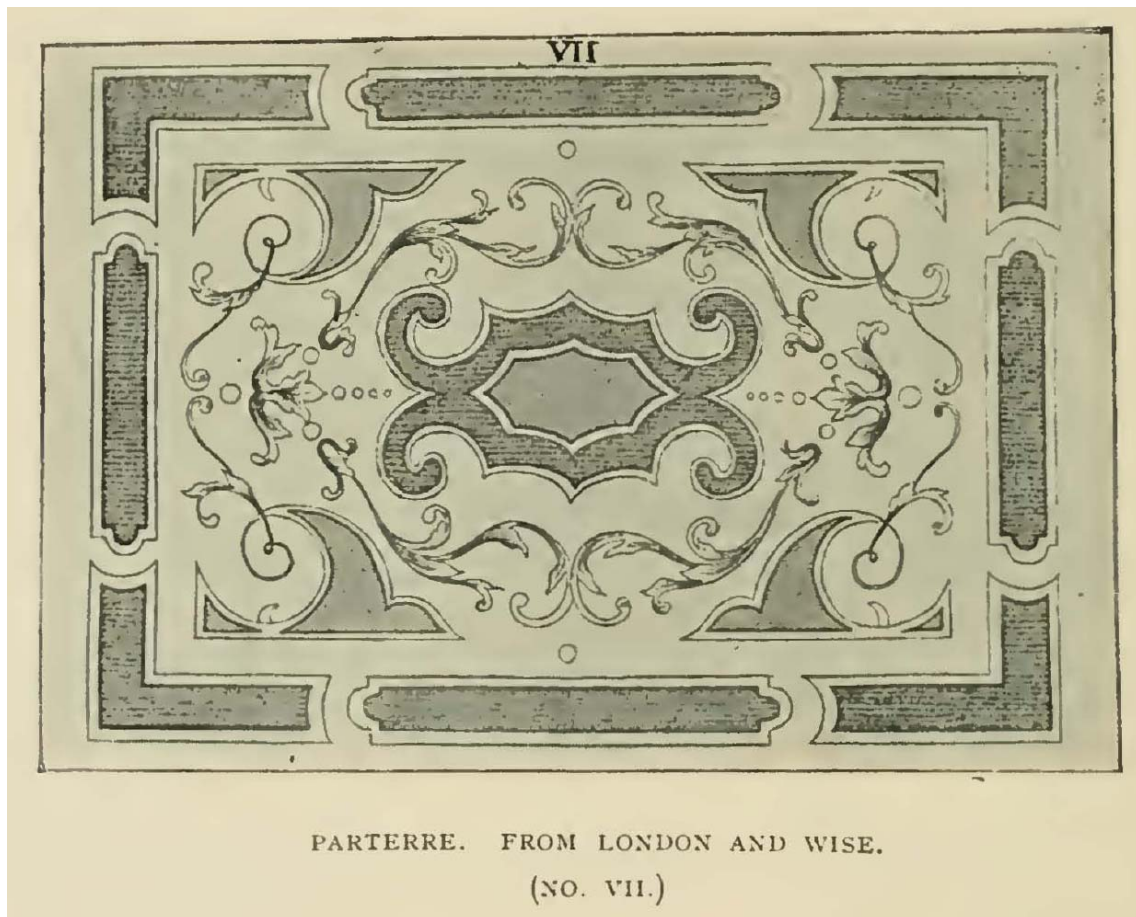
No. VI 「一部は切込み、一部はボーダー付きの緑の芝生のパルテールの形。これらのパルテールは彼らのデザインと対称性に従っていると考えられる。これらは大きな庭園での見栄えが大変素晴らしく、小さな庭園でも同様であり、季節ごとに違った姿で区画を埋め尽くす芝生の青さ *verdue*、花の青緑 *enamel* は目にもうっとりするほど魅力的な眺めを提供してくれる。これらのパルテールは、私が前に述べたような植木鉢（すなわちオランダ甕）で区切って飾ったり、あるいはオレンジの木や自然らしいほかの低木を入れた箱で囲うのもよいかも知れない」。



〔図10-1〕 パルテール ロンドンとワイズより (NO. VI.)

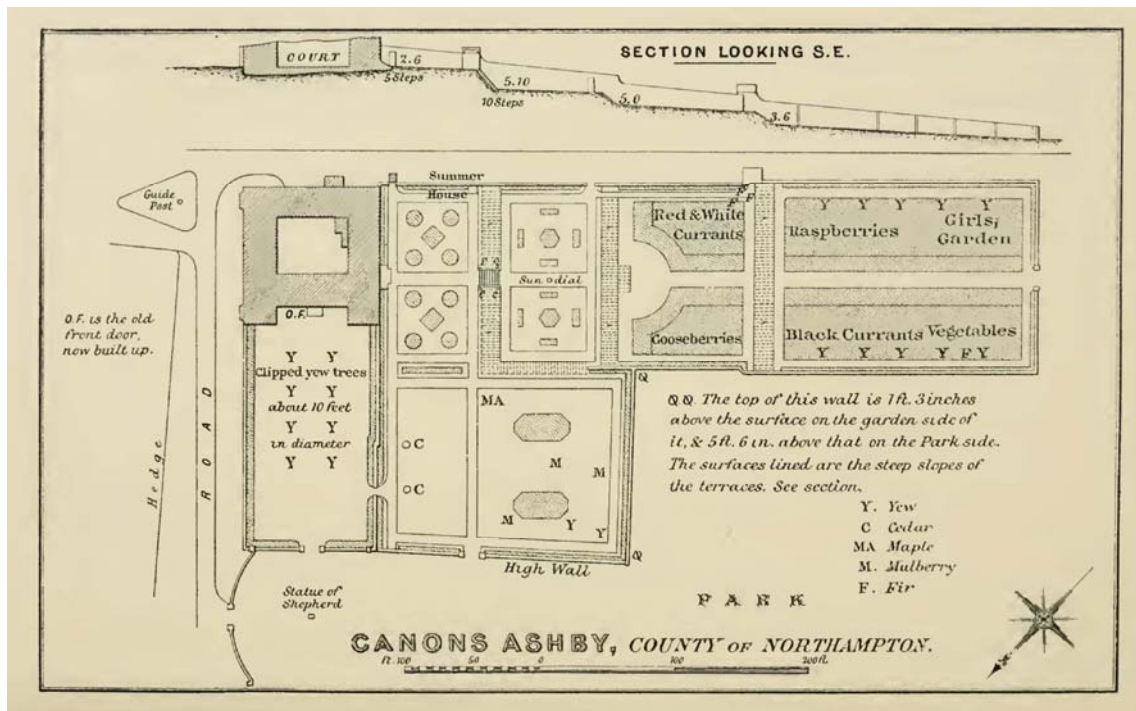
VII. 「芝生の切込みと真ん中に刺繍があり、外側には芝生のボーダーがあるパルテールの形。このタイプのデザインは庭園にとって極めてふさわしく、また素晴らしい飾りの役割を果たすが、特に、芝生の管理がしっかりしていてツゲも整然としており、芝生が上手に刈られている庭園に向いている；またそれをさらに一層美しくするには、Flourishings [装飾曲線部] と Branch-work [分枝部] を黒い土で一杯にすることで、散策路や小径が黄色や白の砂で覆われていれば、違った色遣いによりパルテールを一段と見栄えよくするのに役立つことになる」。場合によっては、敷地は一つのデザインで作られたが、その他の場合は4つの区画に区切られ、その一つ一つの区画に同じパターンが繰り返された。

パルテール同士の間にはボーダーが作られ、その形状は、砂が敷かれた散策路の両側に芝生または花の細長い列があるもの、あるいは所々に低木が配置されているもののどちらかであるが、「一番普通の」ボーダーと言えば「中央が高く盛り上がった作りで、まるでロボの背中のような形でイチイ、低木、花で飾られたものである」。



〔図10-2〕 パルテール ロンドンとワイズより (NO. VII.)

今日見られるキャノンズ・アッシュビー **Canons Ashby** は当時の庭園の格好の事例であり、現在の所有者であるサー・ヘンリー・ドライデン **Sir Henry Dryden** [1818~99年] のご厚意により作成された図面にあるとおり、パルテールは当時どこの庭園にでも見られたであろうものと同じであった。もっともそのデザインはほかの多くの庭園のものよりも、多分さらにシンプルだったかも知れない。この庭園は、元々は 1550 年に造られ、1708 年に改造され、2 世紀近くにわたりその様式の変化というものを拒んできた。それはまさに、シーリア・ファインズが「気持ちよく管理され、きれいな砂利の園路と芝生の区画があり、花木、そしてあらゆる種類の葉物野菜と果樹の宝庫である庭園を越えている」と描いた庭園そのものと言える。



[図 10-3] キャノンズ・アッシュビー

ファインズは彼女の雑誌の中で、都会のガーデニング Town-gardening についても注目してあわせて書いている。煤煙というとんでもない大問題に対処しなくて済む前は、都会の庭園は田舎の庭園と同等以上の手間をかける必要はなく、多くのタウンハウスには見事な庭園が付属していた。それらが簡単で、小さく、囲われていた時は、広々とした田舎と同じよう、町中でも心地よく囲われたものを造ってはいけない、という理由はまったくなかった。今でも大聖堂のある町や市場のある大きな町の中には、昔風の庭園を見つけることができるが、そこでは煤煙と過密により庭園が破壊されることがなかった。しかし、まともな各家庭に庭園があったずっと昔には、町の様子は随分と違っていたに違いない。公開狩猟地 public parks と庭園は、霧や煤煙、そして昼なお暗いというあらゆる不利な条件をもものともせずに近年さらに大幅に改良されたとは言え、決して新しい発明とは言えない。カウリー-Cowley [Abraham~, 1618~67 年] の詩から想像できるように、きっと煤煙公害は 19 世紀末と同じように 17 世紀半ばでも同じように面倒なことであったであろう：－

(仮訳)

“Who that has reason and a smell	理性と嗅覚のある人は
Would not among Roses and Jesamine dwell	バラとジャスミンの間に住もうとしないであろう
Rather then all his spirits choak	むしろその時すべての精神が窒息し
With exhalations of dust and smoak,	塵と煤煙を吐き出すことにより
And all the uncleanness which does drown	そして汚い物すべてが きっと溺死させる

リーズ Leeds は、現在のリーズと比べると当時はほんの村にすぎなかったが、シーリア・ファインズによって次のように描かれている：－「大きな町、大きな街路が何本か走り、清潔でよく整えられており、すべて石造りの良好な住宅。中には立派な庭を持っている家もあり、庭から家に上がる階段があり、その前には壁がある」。ベッドフォードについて彼女は：－「それはウーズ川 Ouse に洗われる古い建物・・・とても良い魚に恵まれ、川岸に庭を持つ者は魚を置いておく籠のようなものを持っており、それぞれの庭の土手の横に鎖で繋いである。それ(川)は見事なボウリング用グリーンとなっている敷地の横を流れ・・・その中には座席と夏のあずまやがきちんと整えられている」と書いている。ニューカッスルでは：－「この地域では至る所、この石炭だらけでその硫黄が空気を汚染し外来者にとっては強い臭いがする・・・ここは気高い町でイングランドのいかなる場所よりロンドンに一番似ている。・・・気持ちのよいボウリング用グリーンがあり、町からちょっと外に歩いて出るとその周りには大きな砂利道があり、両側には 2 列の並木がある・・・木陰の横には可愛らしい庭園があつて、それは紳士淑女が夕刻に散歩するスプリングガーデン spring garden のようなものである；－庭園には温室がある」という発見をしている。

スプリングガーデンとして彼女がここで述べている庭園は、ロンドンにおける流行りの人気リゾートとして選ばれたものである。これらの庭園は今世紀の第 1 四半期以降、その姿を現し、元々はセントジェームズ王立狩猟場の一部であり、その記録が王室会計文書の中の項目として残っている：－

1617 年「穴掘りと植栽ほか：(セントジェームズ) パークのスプリングガーデンのバラの・・・庭師たち、草取りの女性たち：スプリングガーデンで・・・スプリングガーデンのキジと野生のフクロウ」
しかしながら、世紀半ばまでにはそこは公開庭園 public garden となり、今はその名前がつけられた通りによりそこが庭園であつた場所であることがわかる。

ロンドンではその頃既に多くの古い庭園が消えつつあり、そのことをシーリア・ファインズが日記にこう記している：－「シティには以前大きな庭園と離れ out houses のある貴族の館がいくつかあつて大勢が集まつたが、最近では取り壊されて街路や広場に作り変えられ、その貴族の名前で呼ばれている；－そして 1、2 の例外を除いてほとんどすべてこのやり方で、王室にすら及んでいる。ノーサンバランドおよびベッドフォードハウス、モンタギュー卿・・・そして王室庭園と有名な噴水のあるホワイトホール」。ロンドン近辺の庭園に関するギブソンによる 1691 年の描写が残されている*。

*『考古学』 *Archaeologia*, 1794 年所収、ヘイズリット『昔の庭園文献選集』の中に最近、再版。Hazlitt: *Gleanings in Old Garden Literature*

彼は 28 の庭園を列挙し、そのうち 5 つは種苗園である－ブロンプトン種苗園、マイルエントの「クレメンツ」、リケッツ、パーソン、ダービー、このうち 3 つはホックストーンにある。

庭園の中にはロンドンから離れたところにあるものもあり、たとえばハンプトンコート、キューにあるサー・ヘンリー・カペルのもの、シーン Sheen のサー・ウィリアム・テンブルのものである。 イングランドで最初にオレンジの木がカルー一家により植えられたベディントンでは、非常にていねいに管理されてきたため、この国のオランジェリーの中で最も主要な地位を今もって有している。このオランジェリーは長さ 200 フィート、木の高さは約 13 フィート、そして年間 1 万個のオレンジが収穫できる。ギブソンによると、皇太后 Queen Dowager はハンマースミスに立派な温室を持っているが、それは「珍しい植物や花」のためではない；しかし、彼女の庭師、Hermon Van Guine 氏はオレンジとレモンの木を育て、それを「処理」しなければならなかった、というようなことも言っている。アーリントン庭園は「美しい場所」であった。ハクニーのサー・トーマス・クック Sir Thomas Cooke [1648 頃～1709 年] の庭園は大変大規模なものであったにもかかわらず、さらに拡大が図られつつあった†；

†ラムズ礼拝堂 Rams Chapel は 1723 年、この庭園の敷地の一部に建てられた。1704 年 7 月 20 日付けの不動産譲渡証書の中には、礼拝堂当局の所有の中に、2 棟のサマーハウスに関する記載があり、そのうち 1 棟は教会の部屋 vestry として使われている。

ラネラ卿 Lord Ranelagh [Richard Jones, 1641～1721 年] の庭園は「ほんの最近造られたもの」だが「優雅にデザイン」されていた。ランベスの大主教はその頃そこの庭園の改造を進めており、温室を作っていたが、それは「部屋が 3 つあって真ん中の部屋の下にはストーブを入れた；－各部屋の前面はほとんどすべてガラス張りで、屋根は鉛で覆われていた」。ギブソンは 1691 年 12 月に訪問した庭園についてのみ言及しており；その他の同じくらい有名な庭園については省いている。彼はスピタルフィールズとホワイトチャペルの間の大規模な種苗に気づいていない。この種苗の所有者はミーガーが「私の大親友であるキャプテン Qarrle」と呼ぶ人物であり、彼が示した果樹に関する長大なリストの中のどの木であっても、「ほかの様々な珍しい選り抜きの植物」とあわせて、この友人は「入手する」ことができた（*レナード・ミーガー『イングランドの庭師』1688 年 60 ページ *The English Gardener*）。彼はまたストランドのエセックスハウス、およびサマセットハウスについても書いていない；1683 年に首を刎ねられたウィリアム・ラッセル卿 Lord William Russel [1639～83 年] がデザインした庭園のあるサザンプトンハウス、ブルームズベリーについても書いていない。フラムの庭園、これはエリザベスの時代にギョリュウ tamarisk を持ち込んだグリンダル主教 Bishop Grindal [1519 頃～83 年] によって有名になった庭園であるが、この時代になるとコンプトン主教 Bishop Compton [1632～1713 年] によりさらなる改良が加えられ、彼が植えた素晴らしいヒッコリー hickory をはじめとする木々が今もなおそこに行くと見ることができる：－「彼はストーブ温室と庭園に数多くの外来植物の品種を持っており、庭園では昔ならこの寒い気候では弱すぎると思われた植物も多数、順化 endenized させていた。彼は人生の後半の日々に至るまで、年間数日を除き、自ら自分の庭園に出て、

樹木や植物の移植 **removal** や場所替え **replacing** の指示や監督を続けた」(†スウィツァー『田園の設計』1718年 *Ichnographia* コンプトン主教 1632年生まれ、1713年没)。

個人所有の庭園のほか、狩猟地 **parks** の存在がロンドン周辺の田園地帯にその当時ですら美しさを加えた。セントジェームズパーク、そして「もう一つもっと大きなハイドパーク、これは乗馬用であったが、ほとんどの場合馬車で回れるような馬場が作られており、そこは手すりでも囲まれ砂利が敷かれている・・・狩猟地の残りは緑地で鹿が一杯いて、魚や鳥がいる大きな池がある」(‡シーリア・ファインズの日記)。ハイドパークの向こうにはウィリアム国王お気に入りのケンジントン宮殿があり、そこにもウィリアムが開始してアン女王〔在位1702～14年〕のもとで完成した立派な庭園があった。そこで雇われていた造園家は有名なロンドンとワイズで、彼らはすぐ近くのプロンプトン **Brompton** に大規模な種苗園を持っていた。この種苗園は当時一番優れたものであり、植物の膨大なコレクションを保有していた。ケンジントンの庭園自体にも素晴らしいコレクションがあったが、プロンプトンの種苗園のものとは「まったく比肩する余地」(*ギブソン 1691年)はなく、寒さに弱い植物は冬の間プロンプトンで保管された。

ジョージ・ロンドンがプロンプトン種苗園の中心的な創設者であり、ジョン・ローズの弟子であり、一時コンプトン主教の庭師を務めていた。彼は種苗園を作る前と後に海外を旅行し、リズウィック **Ryswick** の和平 [1697年レイスウェイク条約 大同盟戦争の終結] の後、ポートランド伯爵 **Earl of Portland** [1649～1709年] とともにフランスに行った際、ヴェルサイユを訪問している。ロンドンは1713年に亡くなった。種苗園は「ジェームズ2世の治世にほかの庭師と共同して彼が始めたものである。すなわち、カシオベリーのエセックス伯爵の庭師であるクック、サマセットハウスの皇太后の庭師リューカー、そしてストランドのベッドフォードハウスのベッドフォード伯爵の庭師フィールドたちである」(†スウィツァー『田園の設計』1718年)。これらのパートナーたちはロングリート **Longleat** の庭園をデザインし、その敷地を「この4人が代わるがわるに造り始めた」(‡同書)。リューカーとフィールドは死に、そしてクックは引退し、そしてロンドンがヘンリー・ワイズを仲間に引き入れた。ジョンソンによると (§『イングランドのガーデニングの歴史』1829年123ページ)、それは1694年のこととなっているが、ギブソンは1691年にその種苗園のことを「ロンドン氏とワイズ氏の所有であるプロンプトンパーク庭園」と表している。したがって最初の4人が長い年月一緒であったとは見えない。この2人の庭園師はとても有名になり、それはプロンプトンの園芸のおかげだけではなく王国全体にわたって彼らがデザインした庭園のおかげであった。ロンドンは王立庭園の監督およびメアリー女王の宮廷掛 **Page of Backstairs** に任命された。彼らはケンジントンで国王のために仕事をしただけでなく、ハンプトンコートについても相当規模の改変を加えた。そこで行われたちょっと変わったある作業は、半円状の運河沿いに作られたライムの並木道の一行を移植したことであった。北側の土手にあった木が取り除かれ、それまで一番南側であった列の南に移植された。「403本のライムの木で、その直径は4フィート3インチから3フィート、これらの木を取り

除き、次の場所に運び、直径 10 ないし 12 フィートの穴を掘り、1 本ごとにおよそ手押し車 5 杯分の土を持ってくると、その費用は 1 本当たり 10 シリング、合計 201 ポンド 10 シリング」。この移植は最初に木が植えられてから 30 年ほど経っていた。その他の変更は「山の庭」と「王室専用庭園」に加えられ、ニレの枝組で覆われた「メアリー女王の私室」には木が植えられ、昔の果樹園は野原へと変わり、川沿いにテラスが設けられ、そしておそらく迷路が同じ頃作られた。あわせてワイズは宮殿と噴水庭園の間に宮殿の前面全体に沿って走る「広い道」を計画した*。

*この仕事の見積もりでは、道は 650 ポンド 13 シリング、そして横の芝張り、ボーダーの植栽と形成にそれぞれ 490 ポンド 10 シリンと 210 ポンド。－『国庫文書』63 卷 48 他 *Treasury Papers*

ブレナム Blenheim 庭園はもう一つの彼らの偉大な業績であり、完成するまでに 3 年を要した。彼らのスタイルの優れた見本をダービシャー州のメルボルンに今もなお見ることができる。エセックスのワンステッドにあるサー・リチャード・チャイルド Sir Richard Child [1680~1750 年] の庭園、ブッシィパーク Bushey Park、克蘭ボーン Cranborne、そしてハワード城 Castle Howard にある庭園も彼らの手によるほかの事例である；これらのうち一番最後のハワード城で、彼らは「自然で丁寧なガーデニングがかつて辿り着くことができた一番の高み」に達したとスウィツァーは言った。アン女王の即位に際し、ワイズは王室庭園の管理を任せられ、ロンドンは田園地帯の仕事に主に特化していった。彼はしばしば偉大な庭園を巡ることに時間を費やし、仕事の途中にしばしば 1 日 50 から 60 マイルの距離を馬で行ったと言われた。

モーゼス・クックは元からのパートナーの一人であり、果樹に関する本を出版したが、ロンドンとワイズは仲間の中では人気作家であり庭園デザイナーでもあった。彼らがフランス語から翻訳した 2 冊の本は、ジャン・ドゥ・ラ・カンティーニの『完全な庭師』*Complete Gardener* (初編 1699 年) およびレイ・リージェの『引退した庭師』であり、ル・ジャンティ Le Gentil の『孤独な庭師』*Solitary Gardener* もあわせて翻訳された。彼らは自分自身の豊富な経験も付け加えた。そして情報は一人の紳士と庭師との間の問答形式ですべて綴られており、その紳士とは田舎に住む場所を買って「田舎生活の甘美さを味わおう」としている人物が想定された。その紳士がたとえば「海外から私宛に箱が送られてきたとして・・・それを受け取った時、地面が霜で覆われていたら・・・どうしたらよいでしょうか？」と尋ねたとする。庭師：－「木を受け取って、その根の回りには苔が巻いてあってケースに入れて送られてきたとしたら・・・地面にそれを植えることができるまで貯蔵室に置いておかなければならない・・・ケースから根を取り出して、それをきれいに揃えて・・・その根を 1 日水に深く沈めて、そしてセットする・・・あなたがこのルールに従えばあなたの木を一本も失うことはないであろう、たとえ全部で 3 から 4 カ月土に植えておかなくても」という具合である。ロンドンとワイズの経験が続いて述べられるが、むしろ矛盾している：「1698 年、フランス到来のアーモンドの台木に接ぎ木した桃を何本か持っている

る・・・土から出て3か月経って、必要な世話はすべてしたにもかかわらず、全体100本のうち10本は助けることができなかった」。別の章では海外から取り木 layers [若枝を地中に取り込み、根が生えてから切り離す増殖法] や接ぎ木の苗 slips を輸送する時には、初めに蜂蜜でそれらをこすって、それから湿った苔で包むか、あるいは「蜂蜜で練り込んだ陶土 Potter's Earth」の中に突き刺し、苔で回りを包むことが推奨されている。この作業では、人工的にキノコを育てることが推奨されている。極めて時間のかかる苗床を準備するプロセスが述べられており、完了するのにほぼ1年近くかかるものであった。ジャン・ドゥ・ラ・カンティーニの仕事は果樹栽培に限られており、特に果樹、立木づくり（スタンダード仕立て）standards、垣根仕立てのエスパリエ espaliers、壁際に垣根仕立てにした果樹 wall-fruit の正しい刈り込み方についての記述が詳しかった。『引退した庭師』の大きな割合を占める「花の歴史と起源」というタイトルにはガッカリさせられるが、それは、たとえばジキタリス foxglove の起源のように、これが現実離れも極まれりというような神話や伝説の単なる寄せ集めに過ぎないからである。ユノ Juno [ローマ神話で女性の最高神で結婚の女神であるジュノ] はある日働いていて指ぬきを失くした。ユピテル Jove [神々の王で天の支配者であるジュピター] は彼女を慰めようとして、指ぬきを花に変えてしまったと言って、そこでジキタリスが現れた。オーニソガラム Ornithogalum は甘やかされた子どもで、卵の白味だけで育てられ、それは虚弱になり死にかけるまで続いたが、ヴィーナスが可哀そうだと思って、彼の名前を付けた花に彼を変えた、とかそんな話ばかりが延々と書かれていた。ロンドンとワイズは一風変わった植物のリストを作っており、それはどのようにすれば「身の回りのフラワーガーデンで普通に育てている」植物を増やし、あるいは「元気で長持ち」できるかというものであった。アネモネは歯状の芽 fangs によって長持ちし、ツルボラン Asphodils は塊茎によって、プリムラ=アウリキュラ、オダマキ、ギリフラワー、トケイソウ Grenadil 別名 Passion-flower、ラベンダー、マツムシソウ、ヒマワリ、タイムなどは宿根によって；ヨウラクユリは根で作られる吸枝 suckers によって、ランキユラスは爪部 claws [花卉の細くなった基部]、ヘメロカリス Day-lily は球根で、デイジーとハマカンザシ [アルメリア] sea-thrift は花茎 tufts で、ゲッカコウ [チュベローズ] Tuberose はその吸枝によってなどなど。

レナード・ミーガーが書いた『イングランドの庭師』は人気の高い本であり版を重ねた。ただし、著者についてはほとんど知られることはなく、同時代の人々に比べるとずっと古風であった。この本は静かな語り口で果樹や菜園づくりの実用的な情報を多数示しており、「花のカタログ」“Catalogue of Flowers”は、「たとえば花が育つてその場所を飾ること、あるいは香りのよい花束とすることだけを目的としており」、それはイーヴリンやロンドン、ワイズよりもパーキンソンを思い出させるものであった。彼は花の名前を故郷イングランドの名前で呼んだ。たとえば、コベントリー・ベル・フラワー（フウリンソウ *Campanula Medium*）、メランコリー・ジェントルマン（ハナダイコン属 *Hesperis tristis*）、ヤギのヘンルーダ（ガレガソウ *Galega officinalis*）、ノンサッチあるいはブリストルの花（アメリカ

センノウ *Lychnis chalcidonica*)、そして王様の槍、黄色と白 (ツルボラン属 *Asphodelus*)。ミーガーは彼の本の 1688 年版の扉のページで彼自身のことを「ガーデニングの技法について 30 年間携わった実務家」であったと言っている。本の献辞からすると、彼は長年、ノーサンプトンのウォークワース Warkworth のフィリップ・ホルマン Philip Hollman の庭師であったことがうかがえる。ホルマン一家は古き良き一族で、1669 年に亡くなったフィリップはミーガーの仕事を励ましていたようで、確かにミーガーは「きちんと農作業に取り組む気持ちが少しでもあったり、努力している彼の使用人」すべての者を援助したと付け加えている。ミーガーはイングランド全体にわたり、静かな昔ながらの「整然とした」庭園の一つの姿を見せているのかも知れない。



[図 10-4] ネザトン エドモンド・プリドーのスケッチより 1727 年

コーンウォールのネザトン Netherton のちょっと変わった眺めは、1727 年頃この類の庭園を描いたエドモンド・プリドーのスケッチから拝借したものである。デヴォンシャー州のコリトンパーク Coryton Park (*マーウッド・タッカー師の所有 Rev. Marwood Tucker) は現存している格好の実例である。この庭園は 1680 年頃造られ、1756 年に改変された時、昔の庭園はキッチンガーデンとして残され、今も手が加えられずに残っている。上の方の新しい庭園と下の昔の庭園を区切る昔からの壁は、変わったジグザグの形をしている；庭園のほかの場所は単純な線でできており、これはミーガーの本に基づくものと思われる。そのデ

ザインは、周回する散策路、2つの大きな四角のパルテール、そして2つの小さなパルテール、その2つのコーナーは曲線になっており池や噴水の周りに散策路を通すための空間が作られており、そしてそれぞれの区画の中心を横切って、刈り込まれたイチイの垣根がその同じ曲線に沿って、砂利道の端まで続いている。この散策路にはイトスギ、2つの彫像、日時計があり、噴水の反対側には外の壁に向かって旧庭園の館やオレンジリーがある。

このような計画はもはや時代遅れとなりつつあり、当時の傾向としては、整形式のやり方で維持するには大きすぎる庭園を造る傾向にあった。サー・ウィリアム・テンプルは1685年にその危険を見抜き次のように書いた。「庭園の規模については、おそらくそのうち我われから見れば贅沢と思える大きさになるだろうが、4ないしは5から7エーカーが通常の紳士階級の人々が求めるデザインになると思う」。シーンにある彼自身の庭園は大きくはないが、見事に管理されていた；これについてイーヴリンは1688年に次のように書いた。「壁際の果樹の木々は誠に優美にきちんと整列しており、それは私が見たどれよりも極めて優れていた」。彼の晩年におけるサリーの「隠遁所」をムーアパーク **Moor Park** と呼んだが、これは彼が青春時代に愛したハートフォードシャー州のムーアパークにちなんだもので、そのことを彼は、それは「私が今まで見た庭園の中で完璧な姿」†であった、とまで嬉しそうに言い表した。

†サー・ウィリアム・テンプル『エピクロススの庭園あるいは1685年のガーデニングの庭園について』*Upon the Garden of Epicurus or of Gardening in the year 1685.* 彼の『雑録』*Miscellaneous Works* 所収

新しいムーアパークでは彼はオランダ式の庭園を造った。それは何の不思議でもなかったのは、三国同盟 **Triple Alliance** [1668年仏に對しイングランド・スウェーデン・オランダ間で締結]の交渉にあたった政治家としてフランス風よりオランダ風を好んだのは当然であった。ただし、彼は心が広がったのでフランスからも良いものは取り入れた。彼は4つのブドウの新種をイングランドに持ち込んだことを誇りに思っていた：-1. 「フランシュコンテ産のアルボアーズ **Arboyse**、これは小さな白ブドウで・・・我われの気候によく適している・・・マスカット以外のすべてのブドウの中で一番おいしい。 2. ブルゴーニュ、これはグレーまたは薄い赤色で、すべての品種の中で我われの気候のもとで確実に実る、したがって、ほかのすべての品種が失敗する中で、この15年間のひと夏たりとも失敗したことがない；また東側の壁でとてもうまくいった。 3. 黒マスカット、これは皇太后と呼ばれ、一般的な白ブドウと同じくらいに実る。 4. グレーのフロンティニャック **Grizelin Frontignac**、イングランドで私が口にしたすべてのブドウの中で最も高貴なものだが、とても良いものを収穫するには、ものすごく熱い壁と角ばった粒の砂利が必要で、そして夏にも恵まれていなければならない」*。

*このブドウは今やほとんど見かけない。シュルーズベリー近くのベリックに（ガラスのもとで育てられている）木が1本ある

誇り高き「黒チューリップ」*Tulipe noire*の所有者、あるいはブッドレア *Buddlea* †をめぐって争ったアルフォンス・カール *Alphonse Karr* [1808~90年]の狂気じみた年老いた取り巻きたち *savants*とは違い、テンプルは実に鷹揚に彼が持ち込んだブドウの木を広く配ったがその理由についてこう書いている：「この種のことはすべて広く一般的になればなるほど良くなるものだ」と自分は常に思っている

† オレンジ色の丸い花をつけるブッドレア *Buddlea globosa*, 1774年に持ち込まれた [フジウツギ属]。

テンプルの主たる関心は果樹栽培に向かった。花についてはこう言っている：「私は花を見たりその香りをかいだりすることは好きだが、その世話をすることは好きではなく、それは男の仕事というより女の仕事である」。おそらく彼は自分の庭園の花に関する仕事は彼の素敵な夫人ドロシー・オズボーンに任せていたのであろう。彼らの長年にわたる婚約の間に彼女がテンプルに書いた喜び溢れるばかりの初々しく機知に富んだラブレターの中に、彼女自身がガーデニングに興味を抱いていたことを十分に示す下りがある。1654年に彼女は、ベッドフォードシャー州チックサンズにおける隣人であるサー・サミュエル・ルーク *Sir Samuel Luke* についてこう書いている：「ところで最近、サー・サムが何で私に贈り物をくださったりするまでに親切になられたのかがわからない、それはこの庭園の中に彼が欲しいと思っている何かのためなのか、その上、彼の庭園のものを差し上げると言ってくれ、それを私は大変な好意の印として受け取った、その理由は、彼が素敵な、花の栽培者だからです」。

またブドウの木を配ることでブドウの栽培を推奨するのを手伝ってくれた別の庭師は、チャールズ 2 世の庭師で、『イングランドのブドウ畑の弁護』*The English Vineyard Vindicated*の著者であったローズであった。彼は「わが国の土壌と気候の中で十分検証されたすべての最上のブドウの苗と苗木 *sets and plants* を適切な値段で希望するすべての人々」に対し提供した (*果樹園およびブドウ畑に関する書簡, ジョン・ビール *John Beale*, 1676年)。そしてジョン・ビール [1608頃~83年]は、ローズの例にならい、ブドウの苗木を「小作人」*cottagers*に与えることを申し出たが、その多くの者は「不躰にもブドウなんかに関わりたくない」と答えた；ところが彼が数年のうちにそのブドウは市場でいい値が付くだろうと説明したところ、「彼らはすぐに感謝の気持ちを持つようになった」。

1658年6月10日の日記でイーヴリンは次のことを書いている：—「とても有能な植物学者であるモーガンのもとで豊富な品種を集めているウェストミンスター¹の医薬用庭園を私は見に行った」。ヒュー・モーガンについては、ジョンソンが編纂したジェラードの『植物誌』の中で「女王の薬剤師」、「珍しい薬草を保存している面白い人」として2回名前が出てくる。そしてジョンソンは「ロンドンのコールマン通り」に近いモーガンの庭園に「エノキ」“*Lote or Nettle*” treeが育てられていることを知っていた。このモーガンなる人物は、おそらくイーヴリンが訪問したウェストミンスターの庭園の持ち主と同じ人物であると思われるが、彼がこの庭園をどれくらいの期間持ち続けていたかは確かではない†。

† 「ウェストミンスター庭師のモーガン氏」 および 「ハウ博士、ウェストミンスターの薬用庭園の管理人の一人」 のことは、コールズの『薬草の使用法』 1657年 *Art of Simpling* の中で触れられている。

ウェストミンスターの薬用庭園、おそらくこのことであろうが、これが薬剤師組合により 1676年6月に購入された時、それは他の人の所有物であったと思われるのは、組合はゲープ夫人から、植物をチェルシー庭園に移してよいとの了解のもとに賃借権を購入しているからである（†フォークナー『チェルシー』第2巻174-176ページ *Faulkner's Chelsea*）。チェルシーの薬用庭園は1673年に創設され §、数年後にはウェストミンスターのものにとって代わった。

§ 『薬剤師の庭園の歴史』ヘンリー・フィールド著 1820年 *History of the Apothecary's Garden, By Henry Field*



[図 10-5] 薬剤師組合の庭園 チェルシー (1894年)

チェルシーの土地をチャールズ・チェイン Charles Cheyne (後のチェイン卿) [1625~98年] から借りる契約は 1673 年 8 月 29 日にサインされ、その期間は 61 年、賃料は年間 5 ポンド、そして翌年庭園の周りに壁が建設された。初代の庭師はピゴットで 1677 年にリチャード・プラットに引き継がれた。これらの庭師は年間 30 ポンドを受け取り、さらにその後継者であるジョン・ワットは 1679 年に 50 ポンド受け取った。庭園は 21 人の助手、30 人の同業組合員および 20 人の自由農民からなる委員会によって管理された。彼らは温室を作り、その費用は 1680 年で 138 ポンドであった。2 年後、ライデンのヘルマン博士がこの庭園を訪れ植物をいくつか交換しないかと申し出た。これを実行するため、ワットがオランダに派遣された。1685 年の庭園の費用はワットの給料以外に 130 ポンドに達し、このため組合としてはこの水準で庭園を維持することはできないと考え、ワットに年間 100 ポンドを与え、その中で彼が庭園を管理すること、また果物や植物を売ることも認めるという取り決めを行った。同じような取り決めはその後彼の後継者であるドゥーディ Doody [1656~1706年] ともなされた。ドゥーディは優秀な植物学者で、かつ隠花植物 cryptogams を中心とした自生植物の有名な収集家であり、1693 年にこのポストを与えられた。1722 年、この庭園を含むチェルシーの土地を買ったサー・ハンス・スローンは薬剤師組合に、いつまでも薬用庭園とすることを条件にこの土地を提供し、フィリップ・ミラーが園長 curator に登用された。サー・ハンス・スローンのもう一つの条件は、学士院 (彼が院長) に対し毎年 50 種類の新しい植物を、2000 種になるまで寄付することであった。この毎年の寄付は、実際のところ、1773 年まで続き、総数は 2550 品種となった。

サー・ハンス・スローンは長年にわたり庭園について並々ならぬ関心を寄せ続けた。1684 年彼はレイ Ray に彼が訪れた庭園の様子を書いている (*レイ『哲学的な書簡』1718 年 *Philosophical Letters*)。「先日チェルシーに行つて、ワット氏が施した巧みな工夫が彼の植物を保存する上で極めて効果的であることを認識しました。それはこの厳しい冬の中で彼の素晴らしい植物はほとんど枯れなかったくらいです。私が一つ大変驚いたのは、レバノンスギ *Cedrus Montis Libani* が・・・本当にすくすく育っていることで、鉢や温室なしで、春には取り木で繁殖できることである。昨秋蒔かれた種も今のところ大変元気に育っている」。1683 年に 4 本のシーダーが植えられ、うち 2 本は 1820 年時点で元気であり、1 本は 1894 年にも生き残っている。この庭園を今回訪問する前に、数多くのほかの庭園にも行ってははずで、彼の植物の研究の大半はそこで行われ、彼のことをレイは励ました援助した。スローン (1660 年生まれ) は海外に行き、1598 年以來の植物園があるモンペリエで医学の勉強をした。薬剤師たちに土地を渡すずっと以前から、彼は自然史の勤勉な研究によって有名であった。ジャマイカおよび西インド諸島に関する彼の偉大な業績の第 1 巻は 1707 年に出版された。総督であったアルベマール公爵 Duke of Albemarle の医師としてジャマイカにいたスローンは、公爵が現地で急死したため、イングランドに帰国し、その時 15 カ月間で多数の珍しい物、そして 800 種は下らない品種の植物を集めて持ち帰った。彼

は後半生のすべてをチェルシーで過ごし、そこで 1752 年に没した。自然学者としての名声は医師としての名声に比肩した。あの偉大なリンネ Linnaeus [1707~78 年] が若い頃彼に会うために 1736 年イングランドにやって来た。どういう時であっても彼は庭師を励ます人、庭師の友人であった。以下の手紙はその良い実例である：－

サー・ヘンリー・グッドリックからサー・ハンス・スローンへ

ヨークシャー バラブリッジ近くのリブスタンにて 1712/13 年

拝啓

貴殿からいただいたご親切のおかげで、お手紙を差し上げてご迷惑をおかけすることも顧みずお手紙を書くことにしました。また貴殿は好奇心を膨らませることを愛される方であると知っておりますので、私の手紙の内容が貴殿にとりまして、ほかのものに比べそれほど不愉快なものではなかろうと期待しております。貴殿にお願い申し上げますのは、貴殿がお持ちの珍しい植物の中で海外産の希少な樹木、特に耐寒性のものの種子、ナッツ [木の实]、あるいは果実の核 *kernells* をいくつかお持ちでしたら、温床でそれらを育て細心の注意で保存することは私の喜びとするところであり、心からの感謝を込めてそれを買わせていただければと思います；そして私は貴殿がたくさん持っていらっしゃるもの、それはもし何か貴殿のものに事故などがあつた時に、すぐにまた持ってきてくれる人に、その一部を快く分けてあげるほど多くあるもの以外を取り上げようとするつもりはありません。ここでは自分の珍しい木は私自身が中心になって世話をしていますが、貴殿のものは私たちに比べよりロンドンの近くにあると思っております。私はまだ本当のロトスの木 (*Zizyphus Lotus* ナツメの仲間) を手に入れることができず、カラマツ *larch* もまだですが、イーヴリンによると両方ともわが国の気候でも十分よく育ち、また種から育てることもできるかも知れないと言われております；これらの種子やその他の外来植物については育てることに疑いを持っておりません。なお、お願いしているのは木のことでして、小さい植物は私が世話をするには数が多すぎると思われます；もし貴殿がこれらの種類の小さな木をそれぞれ 1 本ずつ私に入手可能とさせていただければ、貴殿に感謝申し上げます。深謝 敬具

H. グッドリック

リブストーンには現在 3 から 4 本のとても素晴らしいカラマツの木が根付いており、多分これらこそがこのお願いに対する返事として送られたものであろう。サー・ヘンリー・グッドリック *Sir Henry Goodricke* [1677~1738 年] はかの有名なリブストーン・ピピン [リング] を持ち込んだ人物で、彼はノルマンディーから 1707 年頃 3 本のピピンを送ってもらい、その 1 本が成長して元祖リブストーン・ピピンの木となった；この木は 1839 年に風で倒されたが、その根から出た吸枝がかなり大きな木となっており、時には今も実をつけている。